

## 中東産油国の社会経済事情（3）

島 敏 夫

### 5. イラン

#### 5-1. 国土と行政区分

図5-1. イラン全土と主要都市



(出所：CIA)

イランの国土総面積は約 150 万平方キロメートルであり、イラク、トルコ、アルメニア、トルクメニスタン、アゼルバイジャン、アフガニスタン、パキスタンの七ヶ国と接している。また、南はペルシャ湾で海に面し、北側でも世界最大の湖カスピ海と接している。陸上では接していないが、ペルシャ湾上ではクウェート、バーレーン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーンとも接している。このように多くの周辺国家と接していることがイランと周辺国家との間に緊張関係を生み出す可能性を秘めている。2006 年 9 月中旬、アラブ首長国連邦の首都アブダビに湾岸協力会議を構成する六産油国の国軍制服組トップが集まった。「我々は地域が直面する潜在的な脅威に備えなければならない」と会議の冒頭でアラブ首長国連邦国軍幹部が発言した。彼らが想定する仮想敵国はイランである。イスラム教スンナ派が政権を握るこれら六ヶ国にとってシーアのイランは警戒の対象である<sup>(1)</sup>。現実の問題として、アラブ首長国連邦との間では3つの島の領有問題が未解決である。また、かつてのイラン・イラク戦争の原因の一つもシャトルアラブ川を挟む両国の国境問題であった。国境線は単に国の領域を画定するだけではなく、豊富な地下資源の帰属が決定されるという意味で、地下資源の豊富なこの地域における国境線は特に重要である。これらの国境線や沿岸線の長さは次の通りである。

表 1 国境線の長さ

(単位：Km)

イラク国境線	トルコ国境線	アルメニア国境線	アゼルバイジャン国境線	トルクメニスタン国境線
1,609	486	40	767	1,206
アフガニスタン国境線	パキスタン国境線	ペルシャ湾沿岸線	カスピ海沿岸線	合計
945	978	2,043	657	8,731

(出所：Armed Forces Geographical Organization.)

イランの行政区画で一番大きな単位は州（オースターン）である。その下により小さな行政区画としてシャフレスターン、バクシュ、市、村がある。州の

(1) 日本経済新聞 9 月 29 日号

数は全国で 30、その名称は次の通りである。

表 2 イランの州

East Azarbayejan	North Khorasan	Kermanshah
West Azarbayejan	Khuzestan	Kohgiluyeh & Boyerahmad
Ardebil	Zanjan	Golestan
Esfahan	Semnan	Gilan
Ilam	Sistan & Baluchestan	Lorestan
Bushehr	Fars	Mazandaran
Tehran	Qazvin	Markazi
Chaharmahal & Bakhtiari	Qom	Hormozgan
South Khorasan	Kordestan	Hamedan
Khorasan-e-Razavi	Kerman	Yazd

（出所：イラン統計年鑑1383年版）

## 5－2. 人口および労働力

イランの人口は2006年現在約6870万人といわれている(CIA推定値)。しかしながら、これは非公式な数値であり、公式な数値は正式なセンサスが行なわれたイラン歴1375<sup>(2)</sup>年時点の60,055,488人である。イランの統計では全国土を都市部定住・地方部定住・非定住に区分して男女別の集計をしている。それによれば、総人口60,055,488人のうち男性の比率は50.8%、女性が49.2%である。都市部の比率は61.3%、地方部38.3%、そして非定住者の比率は0.4%である。都市部の人口は男性18,805,023人、女性18,012,766、地方部の男性11,604,972、女性が11,421,321人である。表3が示すとおり人口が1500万人を越えたあたり、つまり1335年ころから成長率が3%を超え、急激に増えてきている。

(2)イラン歴は西暦622年を紀元とする太陽暦であり、3月の春分の日を元旦とする暦である。西洋暦との対比は次のようになる。

イラン歴	1375年	1380年	1381年	1382年	1383年
西暦	1996～97	2001～02	2002～03	2003～04	2004～05

表3 イランの人口推移

年	人口	年率 成長率	年	人口	年率 成長率
1260	7,654,000		1320	12,833,000	1.4
1270	8,124,000	0.6	1325	14,159,000	2
1280	8,613,000	0.6	1330	16,237,000	2.8
1290	9,143,000	0.6	1335 Census	18,954,704	3.1
1300	9,707,000	0.6	1345 Census	25,788,722	3.1
1305	10,456,000	1.5	1355 Census	33,708,744	2.7
1310	11,185,000	1.4	1365 Census	49,445,010	3.9
1315	11,964,000	1.4	1370 Census	55,837,163	2.5
			1375 Census	60,055,488	1.5

Source: Statistical Centre of Iran.

表4 1375年センサスにおける年齢別人口構成

年齢層	人口	%	年齢層	人口	%
0－4 歳	6,163,024	10.3%	50－54 歳	1,529,078	2.5%
5－9 歳	8,481,845	14.1%	55－59 歳	1,366,728	2.3%
10－14 歳	9,080,676	15.1%	60－64 歳	1,382,946	2.3%
15－19 歳	7,115,547	11.8%	65－69 歳	1,076,373	1.8%
20－24 歳	5,221,982	8.7%	70－74 歳	846,509	1.4%
25－29 歳	4,709,154	7.8%	75－79 歳	364,118	0.6%
30－34 歳	3,980,066	6.6%	80－84 歳	146,470	0.2%
35－39 歳	3,571,779	5.9%	85歳以上	161,711	0.3%
40－44 歳	2,812,086	4.7%	不明	32,356	0.1%
45－49 歳	2,013,040	3.4%	全体	60,055,488	100.0%

（出所：イラン内務省）

また年齢別の人口構成をみると19歳以下の年齢層で51.3%と過半数を超えている。中でも10－14才の年齢層が全体の15%であり、これらの層の若者が現在成人して雇用を求める時期になっている。平均年齢を見ると全国で24.0歳となる。人口総数60,055,488人を構成する世帯数は12,387,943世帯である。世帯の規模についてみると1世帯を構成する家族の人数は次の通りである。6人以上の世帯が34.0%に達しており、3世代同居の多いイラン人の生活を垣間見ることができる。

表5 世帯の構成人数（1395年センサス）

全世帯数	1人世帯	2人世帯	3人世帯	4人世帯	5人世帯	6人世帯	7人以上世帯
12,387,943	547,420	1,402,948	1,976,864	2,278,978	1,974,822	1,571,392	2,635,519
100.0%	4.4%	11.3%	16.0%	18.4%	15.9%	12.7%	21.3%

(出所：イラン統計センター資料より作成)

次に雇用・就業状況についてみると1383年8月（2004年10月）の第1次～3次産業の部門別就業人口比率は、それぞれ22.9%、30.1%、47.0%であった。民間部門が77.1%、公的部門22.7%、組合（コーポレーティブ）部門0.2%であった。同時期の失業比率は全国平均で10.4%であった。州別ではフーゼスタン州が最も高い18%、次いでヤズドが17.8%、人口の多いテヘラン州10.6%、イスファハン12.7%となっている。被雇用者と失業者別の教育レベルを表6に紹介するが、これによると失業者のほとんどは読み書きができる。又、雇用されている人の13.9%は読み書きができない。

表6 被雇用者と失業者の教育的バックグラウンド

単位：%

	1383Aban月（2004年10月）	
	被雇用者	失業者
Literate	86.1	96.6
Primary	23.6	10.4
Lower secondary	19.9	18.2
Upper secondary	6.4	11.3
Pre-university	20.1	34.2
Higher education	12.1	21.8
Theology and religious sciences	0.2	0.1
Literacy courses	2.8	0.5
Non-formal	1.0	0.1
Not specified and not stated	0.0	0.0
Illiterate	13.9	3.4

(出所：イラン統計センター)

### 5-3. 教育

Literateつまり「読書きの出来る」人口は一国の教育レベルを計る物差しの一つである。イラン暦1335年つまり現在から約50年前のイランでは約10%程度しか読書きができなかったわけであるが、10年前で約70%に達している。Literateの率はセンサスの度に増加の一途を辿ってきた。

表7 読書きのできる人口と比率

単位：千人、%

	総人口	Literate	%
1335年センサス	18,955	1,911	10.1%
1345年センサス	25,789	5,556	21.5%
1355年センサス	33,709	12,877	38.2%
1365年センサス	49,445	23,913	48.4%
1370年センサス	55,837	33,966	60.8%
1375年センサス	60,055	41,582	69.2%

（出所：イラン統計センター、イラン内務省）

表8 年齢層別 Literate（1375年センサス）

	人口	Literate	%
6-9歳	6,891	6,361	92.3%
10-14歳	9,081	8,740	96.2%
15-19歳	7,116	6,718	94.4%
20-24歳	5,222	4,739	90.8%
25-29歳	4,709	4,067	86.4%
30-34歳	3,980	3,222	81.0%

（出所：表6に同じ）

全国の比率は約70%というものの、年齢層別に見ると10～14歳の層では96%を超えている。さらに、1375年というのは現在から約10年前のことであるので現在はさらにLiterateの率は上昇していると思われる。イランはパーラヴィー国王時代にいわゆる白色革命の中で教育兵団を組織して全国に派遣して寺子屋式に識字教育を行なった。これらの成果が非常に効果的であったことが立証されている。

大学および高等教育への進学者数も増えている。イスラム・アーザード大学を除く大学への進学許可者数は表9のように推移してきた。ここで注目すべき点は女子学生の急激な増加である。すでに1379年度から女性の方が男性を超えている。同様にイスラム・アーザード大学でも同じ年から女子学生が過半数を超えるようになった。1382－83年は男子が126,292人、女子が121,501であった。

表9 大学入学許可者数の推移

単位：千人

	総数	男子	女子	女子の比率
1365－66年	43,478	30,980	12,498	28.7%
1370－71年	71,433	50,765	20,668	28.9%
1375－76年	158,056	90,600	67,456	42.7%
1379－80年	177,665	87,863	89,802	50.5%
1380－81年	205,026	98,589	106,437	51.9%
1381－82年	221,006	104,079	116,927	52.9%
1382－83年	261,401	120,399	141,002	53.9%

(出所：Minstry of Science, Reseach and Technology)

#### 5－4. 健康・医療

健康・医療部門は前項の教育同様に国民にとって非常に重要な部門である。1973年の第一次石油危機により原油価格が上がりイランの石油収入が増加したとき、当時の政府は社会基盤整備を積極的に行なった、都市部には近代的な病院ができ、その中には近代的な医療設備が備えられた。ハード面での整備は進んだが、ソフト面つまり医療に従事する人材の教育は一朝一夕に完了するものではなかった。1979年のイラン革命や80年代のイラン・イラク戦争などの混乱期があったためにイランの医療関連部門では大きな発展がなかったようである。

表 10 医療関係者数

単位：人

	総数	医師	医療補助員	その他
1365年	169,078	10,944	87,705	70,429
1370年	201,100	17,453	105,658	77,989
1375年	269,894	19,585	149,380	100,929
1379年	266,120	23,553	147,271	95,296
1383年	291,496	24,661	151,193	115,642

（出所：Ministry of Health and Medical Education）

表10により医師および医療関係者の数が徐々に増加してきたことが理解できる。医師の数だけをみると全国で約2万5千人である。うち4500人がテヘラン州にいる。相対に都市部に医師が偏在している傾向があり、地方へいけば、医師の存在も少なくなっている。1383年の医療機関の数は全国で738ヶ所であり、ベッド数は140,874である。738ヶ所のうち健康・医療教育省の関係機関が493ヶ所66.8%、民営が123ヶ所16.7%、その他が16.5%である。

## 5－5. 農業

2004/05年のGDPに占める農業部門の比率は11.1%であった<sup>(3)</sup>。主要農産物の作付面積と生産量は表11の通りである。2004年度は前年に比べて降水量が少なかったにもかかわらず生産量に大きなマイナスが生じなかった。それは、農作業にとって必要な時期に適度の降水があったためである。農業政策の一つは小麦の国内自給の確立である。それに関連して生産者に対する小麦の買取保証制度を設けている。買取金額も諸物価の値上がりとともに上昇しており、小麦の買取価格は1380年から83年の4年間でキロ当たり1050リヤル、1300リヤル、1500リヤル、1700リヤルと変化した。2004年度の海外からの穀類の輸入は346.5百万トン、金額にして8億5百万ドルに達した。この数値は前年に比べて量にして14.3%の減少、金額にして16.2%の増加であった。減少の

(3) イラン中央銀行発行『Annual Review 1383(2004/05)年版』



表 11 農産物の作付面積と生産量

単位：千ha、千トン

	1382年（2003/04年）		2004/05年
	作付面積	生産量	生産量
小麦	6,409	13,440	14,000
大麦	1,510	2,908	2,900
米	615	2,931	3,100
綿花	140	352	430
シュガービート	178	5,933	4,900
シュガーケイン	55	5,196	6,100
茶	31	212	130
オイルシード	245	393	400
タバコ	14	22	26
豆類	1,014	671	650
ジャガイモ	173	4,211	4,600
玉葱	46	1,574	1,620
ピスタチオ	312	235	183

（出所：Ministry of Agriculture Jihad）

理由は国内生産増であった小麦ととうもろこしの輸入が110万トン減少したからである。政府は農業従事者への支援をおこなっているが、2004年度農業部門への金融機関による信用供与は30.4%増の85兆リヤルに達した。これらのうち、44.7%は一般商業銀行（複数）で、残りの55.3%は中央銀行によって実行された。

イランといえば大部分が乾燥地域である。農業に適した地域は北部のカスピ海沿岸が第一である。しかしながら、それ以外の地域でも水の確保さえできれば、つまり、灌漑ができれば農産物の栽培は可能である。では、現在の灌漑による営農はどの程度普及しているのだろうか。次に、1382年における主要作物の営農世帯数作付面積・生産量と灌漑農業と天水（非灌漑）農業に区分けた資料を見ることにする。

表 12 主要作物の灌漑・非灌漑別作付面積と生産量（1382年）

単位：ha、トン

	灌漑営農			天水（非灌漑）営農			灌漑面積 比率
	営農世帯数	作付面積	生産量	営農世帯数	作付面積	生産量	
小麦	957,585	2,427,916	7,511,968	915,574	4,513,370	4,164,284	35.0%
大麦	447,891	606,165	1,624,515	453,163	1,211,407	1,007,176	33.4%
米	517,272	465,453	1,819,990	0	0	0	100.0%
とうもろこし	57,240	177,918	1,231,665	9,061	688	1,327	99.6%
シュガービート	107,440	199,298	5,729,105	0	0	0	100.0%
綿花	67,901	109,575	253,453	9,244	9,278	11,012	92.2%
西瓜	52,075	73,585	1,127,617	23,779	24,944	83,013	74.7%
ジャガイモ	138,619	114,248	2,378,418	23,984	2,445	13,845	97.9%
玉葱	90,538	33,228	793,428	18,286	933	6,033	97.3%
トマト	181,398	100,249	2,473,946	59,229	1,406	13,590	98.6%

（出所：イラン統計センター）

小麦および大麦についてはわずかに約三分の一が灌漑を施しているにすぎない。別の言い方をするならば灌漑をしなくても生産可能であるとも言える。他の商品作物や野菜については90%以上の灌漑率も多くなっていることがわかる。そこで問題は灌漑と天水農業による生産量の差である。小麦と大麦で比較してみよう。

表 13 灌漑と非灌漑による単位あたり収穫量の差

単位：トン/ha

収穫量の差	灌漑	天水	灌漑/天水
小麦	3,049	923	3.3倍
大麦	2,680	831	3.2倍

（出所：イラン統計センター）

小麦と大麦の1382年のhaあたりの収穫量は表13のとおりであった。灌漑による収穫量はそうでない場合の3.3倍の収穫を上げることができている。大麦についてもほぼ同様であった。つまり、当然のことながら灌漑設備を取り入れることにより農家は天候に関係なく安定して3倍以上の高収穫を手にすること

ができるのである。イラン農業省（Ministry of Jihad-d-Agriculture）では主要作物の平均生産コストを統計に発表している。1382年度の灌漑小麦対天水小麦の生産コストは3.22：1、灌漑大麦：天水大麦は3.16対1である。偶然にも収穫量の差に丁度等しい結果となっている。つまり、灌漑農業は天水農業の約三倍の収量が上がるけれども、コストも三倍程度かかることになる。単位あたりのコストを詳細に計算した結果は拙著『中東世界を読む』（2006年）に詳しく記載している。エネルギー省の発表資料によると1381年度の平均降水量は246mmであった。このように極めて少ない降水量の下で農業を営むためには灌漑に利用できる水資源の確保が重要である。1381年においては貯水能力を6億1580万トン増加させることができた。その結果、全国で8万8600haが灌漑・排水ネットワークを整備することができた。

開発経済学において農業部門を論じるとき、「緑の革命」について述べられるのが常である。「マルサスの罠」として知られているマルサスの考え方でいくなれば、人々は最低の生活水準から抜け出すことができないわけであったが、農業部門において技術的な革新を成し遂げた結果、経済は飛躍的に発展した。「緑の革命」には品種改良、肥料の利用、機械化等さまざまなものを上げることができる。イランにおいて「緑の革命」はどう推進されたのであろうか。1970年代、筆者はイランの農業開発プロジェクトに参画して現地にいた。我々が立案・具現化したのは水資源開発を行うことにより灌漑農業を普及させるプロジェクトならびにカスピ海周辺の農業機械化であった。当時、他のコンサルティング企業は営農指導のプロジェクトを行っており、多収量品種の水稻の導入を指導していた。現地で栽培されているインディカ米に比較して数倍の収量を得ることのできる日本で開発された品種を持ち込んだのであった。結果は失敗であった。たとえ収量が多くても商品価値が低かったのである。食べなれているインディカ米に比べてベトベトして不味いという評価であった。国民性、民族性、文化、嗜好の違いにより受け入れられなかった。インディカ米といっ

ても種類は豊富であり、おいしい種類のものも沢山あることを教えられたのであった。イラン農業における肥料の普及状態と機械の導入状況は次の通りである。

表 14 肥料と農薬の普及状況

	肥料	農薬
1365年	1,699,098	
1370年	2,114,444	
1375年	2,225,669	15,823
1379年	3,047,582	27,105
1380年	2,919,813	25,578
1381年	3,088,415	25,822
1382年	3,408,612	28,194
1383年	4,053,178	27,099
(単位)	ton	ton

(出所：イラン統計センター)

表 15 農業機械の保有台数（1382年）

機械の種類	台数	機械の種類	台数
Tractor	2,419,557	Tractor plough	2,047,513
Tiller	425,889	Disk	1,072,430
Combine	1,014,949	Furrower	238,762
Trailer	1,498,503	Ditcher	322,564
Harvester	214,061	Cultivator	419,354
Mower	82,195	Fertilizer broadcaster	307,238
Rake	40,706	Tractor sprayer	732,700
Baler	128,462	Knapsack sprayer	372,761
Chopper	8,054	Motorized sprayer	631,831
Wheat & Barley thresher	1,215,846	Water pump motor (diesel)	571,002
Rice thresher	275,678	Electric motor	497,947

(出所：イラン統計センター)

## 5－6．畜産業

イランでは畜産部門も盛んである。畜産といっても牛肉や豚肉は殆ど食用には供されない。中心は羊である。イラン人の食生活において羊肉と鶏肉は欠かすことのできないものである。ペルシャ語で肉という意味の gusht（グーシュト）と言えば羊の肉を指す。代表的なイラン料理はチェロウ・キャバーブである。インディカ米のさらさらしたライスにバターと卵の黄身をかき混ぜる。ソマーグ（しその葉の粉末のようなもの）をかける。そして、焼きたての羊のキャバーブをご飯の上にのせて食べる。ヨーグルトと生玉葱と一緒についてくるのが一般的である。薄くスライスした肉をバルグ（葉っぱ）と呼び、挽肉にしたものを板状にしたものをクビデ（ミンチ）と呼び、前者の方が高い。イラン料理は家庭的なものが多く野菜やハーブや豆類を豊富に使い、極めてヘルシーである。肉と胡桃を粉末にして煮込んだものが「フェッセンジャー」である。羊肉を使えば「フェッセンジャー・グーシュト」であり、鶏肉を使えば「フェッセンジャー・モルグ」となる。ライスケーキのように固めて炊き上げてサフランを豊富に使った料理は「タッチン」であるが、羊肉の「タッチン・グーシュト」も美味しいし、鶏肉の「タッチン・モルグ」も非常に美味である。肉の違いによって味も異なり絶妙な味を楽しむことができる。

さて、畜産農家と彼らの飼育する家畜はどの程度いるのであろうか。

表 16 畜産農家の数と家畜数（1375 センサス）

	畜産従事世帯数	家畜保有数
羊	1,117,281	37,137,289
山羊	1,070,057	20,166,878
牛	1,250,232	6,009,547
水牛	29,141	159,196
ラクダ	17,104	139,287

（出所：イラン統計センター）

表からわかるように圧倒的に羊と山羊の数が多い。畜産農家は一種類だけの家畜を飼育しているのではないから、世帯数を合計しても畜産農家の総数にはならない。また、地域的に畜産適地と不適な地域がある。統計から畜産農家および家畜頭数の多い州はホラーサーネ・ラザヴィで、羊の頭数が4,776,683頭(13%)、山羊の頭数が1,405,250頭(7%)である。ファールス州では山羊の数が3,275,734頭と山羊全体の16%を飼育している。これら畜産農家は単に食肉用とするだけではなく、当然ミルクの採取も行なっている。羊や山羊のミルクは飲料にも供されるが、最も多い利用方法はヨーグルトへの加工である。イラン人の食生活でヨーグルトは欠かせないものである。また、羊毛としての用途も大きい。1382年度、全国で97万世帯が2,952万頭の羊を飼育して3,600万トンと羊毛を生産した。同様に27万世帯が545万頭の山羊から245万トンのウールを生産した。

牛肉は殆ど食べないと述べたが、統計資料には「Modern Cattle Farm」という名称で1379年時点8,559ヶ所が計上されている。そのうち7,816ヶ所は乳牛を飼育しているが、食肉牛の飼育は743ヶ所に過ぎない。イスラム国家であるが、100%がモスLEM（イスラム教徒）ではない。また、豚肉はイスラム教徒（モスLEM）は食べないが、イスラム国家イランといえども非イスラム教徒が若干存在している。1375年時点での分布を以下に示しておく。

表 17 信仰する宗教（1375年センサス）

宗 教	モ ス レ ム	ゾ ロ ア ス タ ー	キ リ ス ト	ユ ダ ヤ	そ の 他	不 明	計
人数	59,788,791	27,920	78,745	12,737	57,579	89,716	60,055,488
%	99.56%	0.05%	0.13%	0.02%	0.10%	0.15%	100.00%

（出所：イラン統計センター）

率にすると非常に少数ではあるがキリスト教徒も8万人近くいる。彼らの多くはアルメニア人であると思われる。1797年のイラン革命前まではアルメニア人たちのために豚肉専門店も存在したが現状は定かではない。

### 5－7．漁業

5-1で述べたようにイランは長い海岸線を有している。北にカスピ海、南にペルシャ湾があり、さらに内陸にも湖や河川がある。そこでは漁業で生計を立てる人々もいる。漁業組合に所属している地域別の人数を見ると全国でわずかに3万9千人でしかない。1383年の統計値は次のとおりである。ブシェール州8,398人、フーゼスタン州5,273人、シスタン・バルチスタン州2,574人、ゴレスタン州1,712人、ギラーン州7,043人、マーザンデラン州4,984人、ホルムズガン州8,850人。そして、そこで捕獲された漁獲量は次の通りである。

表 18 漁獲量の推移

単位：ton

	総量	カスピ海	ペルシャ湾	内陸河川・湖沼
1365年	133,425	11,425	110,000	12,000
1370年	327,727	34,596	248,000	45,131
1375年	400,020	74,100	260,920	65,000
1379年	424,500	98,000	260,500	66,000
1380年	399,000	62,550	262,805	73,645
1381年	401,670	42,843	269,000	89,827
1382年	441,836	32,533	299,128	110,175
1383年	474,500	35,775	314,165	124,560

(出所：Fisheris of Iran)

イランの漁業といえば世界的に有名なのがキャビアである。キャビアはチョウザメの卵の塩漬けである。フォアグラ、トリュフとともに世界三大珍味の一つである。カスピ海以外ではアムール川でも採れることが知られているが、カスピ海産のキャビア、それもロシア産よりイラン産キャビアの品質が良いとされている。チョウザメの種類によってキャビアの品質も異なる。最も大きな

チョウザメのブルーガ（Beluga）は体長3 mから4 m、体重300kgを超えるものがある。キャビアの粒も大粒で黒より灰色に近い。産卵まで20年以上かかり、体重の15%程度のキャビアを取ることができる。体長2 m程度のがオシュトラ（Astra）である。キャビアは中粒で茶色気味の黒灰色、時には金色に変化するものがあり、ゴールデンキャビアといって珍重される。筆者はカスピ海沿岸の町ラシュト（Rasht）市に2年ほど居住したことがあるが、そのときに何度がお目にかかることができた。最も小さいチョウザメがセヴルーガ（Sevruga）である。体長1 から1.5 m、体重も25kg以下であるため、キャビアも小粒である。色は暗灰色で黒に近い。日本でキャビアというと殆どこのキャビアであるが、他の種類のチョウザメのキャビアとは味が月とスッポンである。

表 19 チョウザメとキャビアの生産量の推移

単位：ton

	キャビア				チョウザメの肉			
	総量	Beluga	Asetra	Sevruga	総量	Beluga	Asetra	Sevruga
1365年	303	4	95	204	1,687	164	587	936
1370年	283	6	112	165	1,789	202	815	772
1375年	195	7	96	92	1,295	165	669	461
1379年	93	5	60	29	1,000	139	633	228
1380年	88	3	64	21	870	95	620	155
1381年	68	4	52	12	642	67	482	94
1382年	53	3	43	7	463	54	349	60
1383年	40	3	33	5	460	63	340	57

（出所：Fisheries of Iran, イラン統計センター）

話がそれたが、表 19 が示すように、キャビアもチョウザメの乱獲で生産量が減少の一途を辿っている。1365年には303トンであったものが、1383年にはわずか40トンでしかない。カスピ海の試験場では1970年代以前から人口養殖も行なっているが商業ベースにのるほど簡単ではないようである。表にはチョウザメの肉の生産量が示されているが、1379年以後の肉の統計値にはキャビ



アの量が含まれるようになった。ちなみにチョウザメの肉の味は淡白で嫌味のないものである。

#### 5－8. 農林水産業生産物の輸出入

1382年185万トンの農林水産物が輸出された。金額にして16.6億ドルであった。これは量にして22.3%増、金額では32.7%増であった。この部門の輸出が石油・ガスを除いた輸出量全体に占める比率は量にして12%、金額では27.8%に達する。前年に比較して若干数値が好転しているといえる。輸出金額を輸出量で除したトン当たり輸出金額は897.4ドルとなり、前年比8.5%増となる。その主な理由はこの部門に占めるピスタッチオ輸出額のシェアが増えたことである。ピスタッチオの輸出額は498百万ドルから668百万ドルに大きく増加した。

表 20 輸入実績

単位：千ドル、ton

	1381年		1382年		増減	
	金額	量	金額	量	金額	量
乾燥果実	635,416	428,264	819,708	457,241	29.0	6.8
野菜	257,489	710,287	311,244	837,741	20.9	17.9
畜産製品	145,700	63,089	198,989	83,886	36.6	33.0
海産物	57,822	15,009	85,906	19,515	48.6	30.0
農業加工品	157,209	299,319	247,239	454,891	57.3	52.0
農林水産関係合計	1,253,636	1,515,968	1,663,086	1,853,274	32.7	22.3
非農林水産系合計	3,354,793	11,845,913	4,309,076	13,614,313	28.4	14.9
非石油ガス部門合計	4,608,429	13,361,881	5,972,162	15,467,587	29.6	15.8

（出所：イラン中央銀行「経済報告書」）

1382年の農林水産物の輸入は799万トン、金額にして26.5億ドルであった。輸入量が16.3%減少したにもかかわらず輸入額が11.8%増加している。石油・ガスの輸入を除いた輸入全体に占める比率は量では前年の35.5%から26.6%に減少し、金額でも10.6%から10%に減少した。単位あたりの輸入額は331.5

ドルと前年比 33.6% の増加となった。輸入実績を表 21 に示した。

表 21 輸入実績

単位：千ドル、ton

	1381年		1382年		増減	
	金額	量	金額	量	金額	量
小麦	380,390	2,839,075	119,205	773,359	-68.7	-72.8
大麦	2,717	24,818	35,386	191,135	1,302.4	770.1
米	292,007	1,047,499	252,297	875,018	-13.6	-16.5
茶	33	12	2	1	-93.9	-91.7
砂糖	158,131	825,364	59,082	287,628	-62.6	-65.2
植物オイル	477,345	983,631	669,063	1,173,470	40.2	19.3
動物オイル	11,061	13,800	6,534	10,249	-40.9	-25.7
食肉	25,753	15,786	58,475	34,340	127.1	117.5
魚肉	9,824	11,840	34,492	38,754	251.1	227.3
家禽の肉	6,655	7,528	738	1,219	-88.9	-83.8
その他	1,007,116	3,786,242	1,415,087	4,608,709	40.5	21.7
農林水産関係合計	2,371,032	9,555,595	2,650,363	7,993,882	11.8	-16.3
非農林水産系合計	19,904,157	17,371,370	23,947,375	22,111,976	20.3	27.3
非石油ガス部門合計	22,275,189	26,926,965	26,597,738	30,105,858	19.4	11.8

（出所：前表と同じ）

## 5－9. 補助金供与の実態

これまでに主要農産物に対しては政府が買取り保証をしていることを紹介したが、政府はさらに主要農産物に補助金を支給している。主要農産物に対して支給した 1382 年度の補助金は前年比 25.7% 増の 15.2 兆リアルに達した。政府が供与する補助金全体に占める比率は 1381 年度の 92.1% から 78.7% に減少した。小麦に対する補助金が全補助金の 61% を占めている。前年 1381 年の 76.5% に比べると低下したが、補助金の金額は 17.2% 増になっている。他の農産物に対する補助金に比べ小麦の補助金がぬきんでているのは、イラン人の食生活において主食は小麦粉を原料とするナーンと呼ばれるパンであるからである。ナーンの種類も豊富で、居住地域のあちこちにナーンを焼いているお店があり、イランでは毎食時になると焼きたてのナーンを買い求め、持ち帰る姿が全国各地でも見かけられる。

表 22 農産物等に対する補助金支給の実績

単位：十億リヤル

	1381年	1382年	増減	シェア(1381)	シェア(1382)
小麦	10,060.5	11,788.1	17.2	76.5	61.0
米・植物油・砂糖	289.9	915.7	215.9	2.2	4.7
ミルク・乳製品	729.4	1,314.3	80.2	5.5	6.8
肉	298.5	415.0	39.0	2.3	2.1
農薬・肥料	627.5	670.0	6.8	4.8	3.5
農業関係補助金計	12,116.0	15,223.8	25.7	92.1	78.7
政府補助金総額	13,152.5	19,322.8	46.9	100.0	100.0

(出所：Ministry of Economic Affairs and Finance, and Organization for Protection of Consumer and Producer)

イランイスラム共和国はその名が示すとおりイスラムを旗印にしている国家である。イスラム法の精神で相互扶助の精神を重要視する国である。農産物以外でもガソリンに対する補助金も膨大な金額となっており、見直しを迫られている。

## 5－10. まとめ

イランは産油国である。豊富な石油ガス資源をもとに石油化学製品・石油製品、天然ガス製品を輸出する工業化路線が極めて妥当な開発政策であろう。しかしながら、第一次石油危機以後のイラン社会は本稿でも述べたように人口が急増した。すでに7千万人に達しようとする勢いである。イランにとって最重要課題は雇用創出である。石油ガス産業は雇用創出に有効であろうか。答えはノーである。石油化学事業は技術集約的な代表産業である。精製施設や石油化学プラントに多くの雇用は期待できない。それでも、拙速な人々は工業化の推進を謳うかも知れない。7千万人という人口を抱えたイランは市場としても魅力的である。EU諸国はエネルギーを求める一方でイランを輸出市場として狙いを定めている。核開発疑惑のイランに対して米国のように高圧的な態度にすることは絶対にありえない。イランとEUはブッシュ政権が存続している間は

ジャブの応酬で時間稼ぎをする。イランは輸出競争に勝てるような工業製品を生産できる力を今現在には有していない。先進諸国の技術移転が必要である。技術移転すなわちイランに対する投資は現状ではリスクが多くて実現が程遠い。1990年から2000年までの10年間で中東地域に対する海外直接投資（FDI）は二分の一に減少した。現在イランで行なわれている製造業種は食品加工、セメント工業、自動車生産はノックダウン（組立て）程度である。諸外国の投資を求める工業化推進はアフマドネジャード大統領の政策の下では難しい。

次に、このまま人口が増えていけば食料不足が深刻になる。そこで、イランがまず推進しなければならないのは農業開発である。幸い、イランにはカスピ海沿岸のギラーン州、昔から綿花栽培で有名なマーザンデラン州など北部は農業地帯である。南部のフーゼスタン州はかつて米国企業がアグロビジネスのプロジェクトを展開しようとした一帯であり、水資源開発をして多目的ダムが作られている。計画的な営農指導を行なえば明るい将来が見えてくる。イスラム国家らしいウンマ（共同体）の精神を生かしたイランの得意なコーポレーティブ（組合）組織による農業の推進が行なわれればイランの農業は一挙に飛躍してGDPの20%程度にまでは成長することになるであろう。